

汚泥の掻き出し作業 (7/17)



4. 復旧作業 (7月15日～27日)

復興に向けての復旧作業としては、大きく以下の項目を実施しました。

(1) 社員向け対応

1. 作業人数

復旧作業中は、会社を無休、18時終業とし、社員は交代で休暇を取ることとした。日別の作業人員数は、以下のとおりである。

【日別の作業人数】

日付	役員	職員	パート	請負	研修生	社内計	ボランティア	合計
7月15日(日)	2	37	3		1	43	40	83
7月16日(月)	4	40	3		1	48	59	107
7月17日(火)	4	42	3	1	1	41	30	81
7月18日(水)	4	42	2	1	1	50	25	75
7月19日(木)	4	42	3	1	1	51	24	75
7月20日(金)	4	32	2	1	1	40	20	60
7月21日(土)	4	20	1	1		26	33	59
7月22日(日)	2	34	3		1	40	46	86
7月23日(月)	4	43	3	1	1	52	22	74
7月24日(火)	4	43	3	1	1	52	17	69
7月25日(水)	4	42	3	1	1	51	9	60
7月26日(木)	4	31	2	1	1	39	12	51
7月27日(金)	4	29	2	1		36	9	45
合計	48	477	33	10	11	579	346	925

※ボランティアの人数は、昼食用の弁当の注文数から推定した数字であり、実際にはこの数字以上の方々にご協力いただいたと考えられる。
※ボランティアは、一般のボランティアとは異なり、お取引先、修理業者、社員の家族、役員社員の関係者を指す。

上記のとおり、当社では13日間、「早期復興」に向け、のべ人数社員579名、ボランティア346名、合計925名で作業に当たった。以下復旧作業中に、会社として取り決めて実行したことを列挙するとともに、同時にその成果について記しておきたい。

- タイムカードが使用できないため、出退勤及び休日の管理は各課毎に指定用紙に記入させ、課内で管理、休日の割り振りをさせた。
- 作業に当たり、熱中症対策として社内2か所に給水場を設けた。給水場には取引先から頂いたお茶、ジュース等を水で冷やし準備したほか、塩分補給のため塩あめ、梅干し等も準備した。
- 飲料水は多種準備したがスポーツ飲料やお茶が喜ばれ、塩分補給ではカリカリ梅が人気だった。
- 飲料水は、ゴミ等の問題で、缶よりペットボトルが、1.5ℓサイズより500mlサイズが好まれた。
- 昼食は、22日迄の約1週間毎日全員分の弁当を会社で準備した。同じものを同じ時間にみんなで食べることで、更なる連帯感が生まれたようである。

- ボランティアの方々には、復興作業が終わるまで、昼食の準備を継続した。
- 20日が夏季賞与支払い日となっていたが、予定通り支払った。今回の惨状を目の当たりにし、会社の存続自体を危惧する社員も多少なりともいたようなので、この賞与の支払いはモチベーションの維持、そしてアップに少なからずとも繋がったのではないかと思う。
また、25日には就業規則に基づき、被災した社員にお見舞金を渡した。

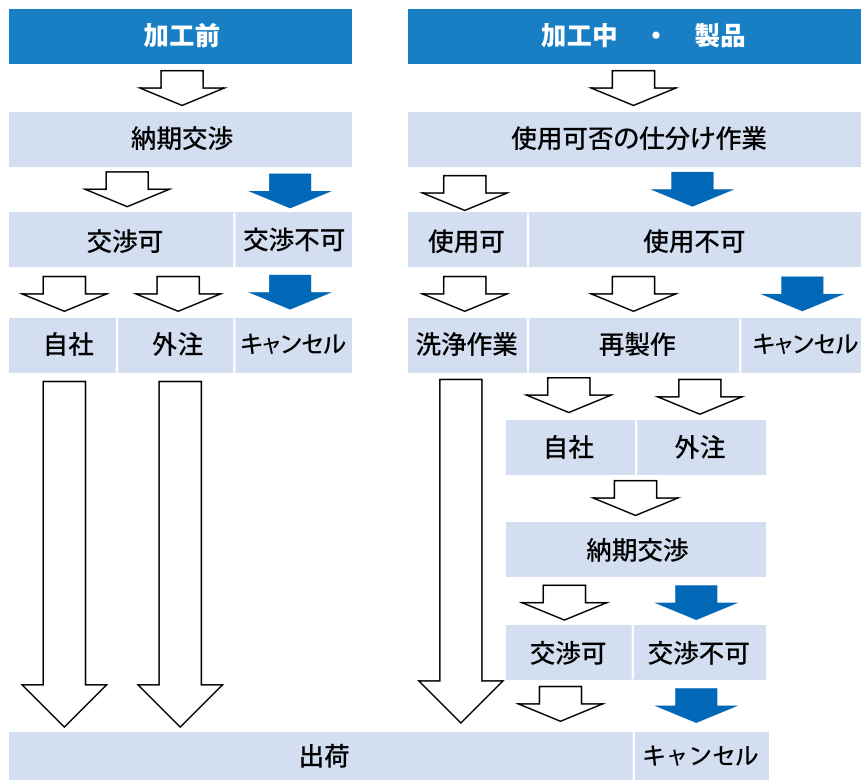
2. 安全衛生

- 上記対策にも関わらず、疲労の蓄積もあってか、3名が熱中症の疑いで休暇を取った。
- 炎天下での汚泥の掻き出し作業は、体力の消耗が激しいため、帽子の着用、こまめな水分補給を再度徹底し、再発防止に努めた。
- 残念なことに、労災事故が1件発生した。内容としては、24日クレーンの荷卸し作業中、鋼板接地時に免許を持っていない社員が気を利かせて吊り上げ用具を外そうとした時に、両手指先を挟み、左手薬指指先にヒビが入ったというものだった。
また退勤時の工場の未施錠が連日続いた。厳しい労働環境の中での作業が続いており、安全衛生がおざなりになっている感も否定できないため、復旧の道筋が見え始めたことも踏まえて、「日常を取り戻そう」と朝礼、終礼を通じて繰り返し指導した。

(2) 取引先、協力企業向け対応

1. 受注済品の取り扱い

受注済品は、加工前、加工中、製品と、大きく3つに分類し、基本的に以下のような対応を行った。



納期交渉の連絡は、加工工程毎の各担当課長により行われた。

- 加工に当たっては、事務所に控えとして保管していた図面が浸水を免れ、使用することができた。ただし全てが揃っていたわけではなく、再度図面を提供してもらうこともあった。
- 受注状況、進捗状況を調査するため、工場内の図面を集めて回った。

今回の被災により、当社に発注いただいたお客様に対して、多大なるご迷惑をかけてしまったことは、その発生要因が何であれ真摯に反省し、対策を立てなければならない。



水没のため、破棄した製品 (7/27)

2. 外注依頼

- 外注依頼は、上記の仕分けに基づき、営業部長及び各担当により行われた。協力企業計5社に外注協力依頼を行い、PCデータが無事だったため、製作自体も滞りなく進んだ。
- なお今回の協力は、田名部製作所（敬称略、以下同様）（みやま市）、シンエイメタルテック（佐賀県神埼市）、ユーアイ技研（熊本県荒尾市）、三松（筑紫野市）、三和金属（北九州市）をお願いした。

協力依頼をした5社とも快くご協力いただいたことに、深く感謝したい。

(3) 復旧作業

1. ボランティア対応

復興に当たっては、15日から27日までの間に、のべ346名のボランティアの方々のご協力を頂いた。遠くは、福岡市、北九州市、さらには岡山県備前市からも、清掃作業に駆けつけていただいた。今回の早期の復旧は、このボランティアの方々のご協力、ご支援なしでは不可能であった。（ここでいうボランティアとは、一般のボランティアとは異なり、お取引先、修理業者、社員の家族、役員社員の関係者を指す。）

また正式なボランティア受付を行ったうえでの人員数の把握ではないため、実際にはこれ以上の方々にご協力いただいていると思われる。ボランティアの方々には、機械類の貸出、重機の運転、清掃作業だけではなく、貴重な知識や知恵、道具等もご提供いただいた。

作業内容としては、男性には汚泥の掻き出し及び洗浄作業、女性には拭き上げ作業をお願いしていたが、作業現場によっては指示命令系統がうまく機能せず、やって頂きたいことは多々あるのにも関わらず、手持ち無沙汰となる状況も見受けられた。なおボランティアのみなさんには、飲料水、昼食用の弁当等を会社で準備し、社員と一緒に昼食をとっていただいた。

また、ある程度汚れることを想定して参加して頂いている方が殆どのため、多少の無理は気持ちよく引き受けていただけたことに、大変感謝している。

課題としては、ボランティアの受け入れを一本化していなかったために、どれだけの方に来ていただいているのか、誰にどんな作業をやっていただいたのか、把握できていなかった点である。名札等もないため、社員も誰に手伝っていただいているのか、どう対応してよいか、わからなかったこともあった。

2. 清掃作業について



水を利用した汚泥の洗浄（7/17）

清掃作業の指示は、工場長を中心に行われた。策定準備していたBCPの中で、完全に盲点となっていたのが、この清掃作業である。立上げ作業の中に、この清掃作業が含まれている感があり、業者による機械の修理待ちの時間に少々行うというイメージであったが、清掃作業が早期復興のための大前提であり、ここまで困難であるとは予想できなかった。

清掃作業は、大まかには「汚泥の掻き出し⇒使用可否の仕分け⇒洗浄⇒拭き上げ⇒整理」の順で進んでいくため、処理方法、最初に行う場所、手順等をきちんと指示していないと、同じことを何度でもやっているように感じられるため、モチベーションの低下につながる。

清掃作業は、汚泥まみれ、汗まみれの作業となり、復興のための確かな手ごたえもない状況で行うため、できれば勢いのあるうちに作業を終了すべきである。

また清掃作業が、復旧のスピードを大きく左右するため、清掃作業でのモチベーションの低下は、絶対に避けなければならない課題である。清掃作業で役立つもの等は後程紹介するが、今回の清掃で最も重要だったものは、洗浄用の水の確保である。17日という早い段階で水道水が一部復旧したが、洗浄に当たっては大量の水が必要となる。洗浄水は、トラックに大型水タンクを積み込み、JAの農業用水利、ガソリンスタンドから毎日補給することで確保した。

3. 通常業務の立上げについて

18日には、大阪から災害対応を熟知した修理業者に駆けつけてもらったため、汚泥の除去作業と並行して修理が開始された。汚泥の除去に目途が付き始めたこともあり、機械修理を最優先に位置づけ、各機械の担当者を修理業者の補助要員として配置した。

被害の状況により機械毎の通常業務立上げ日は異なるが、シャーリング機3台を除き、27日までに、会社としてお客様にご迷惑をおかけしない程度の業務を立ち上げることができた。

システム関係では、サーバーが浸水しなかったことが大いに幸いした。

機械、PC、システム等全てにおいて、修理業者を早期に確保し、修理しやすい環境を整えることが、早期の復旧に直結する。なお各部署、各社員からの声をもとに、通常業務立上げのために【役立つもの】【改善すべきもの】は、次章にて紹介する。

(4) 財務、保険対応

1. 財務関係について

当座資金については、日繰り日計表により3ヶ月先まで管理しているため、当面の心配はなかった。但し、すぐに修理請求が始まるので、借り入れは必要になる。

手持ち現金については、復旧作業に伴い現金の支払いが多くなるので、通常の3倍を準備した。立替金の清算は、リスクと手間暇を考慮し、その都度行わず週に1度だけとした。

耐火金庫が水没し、保管場所の確保が困難だったため、現金、小切手、手形、社印等は、経理担当者が、リュックサックに入れ、背負って管理した。 便利な面がある反面、リスク等を考えると、改善すべき課題である。

2. 保険関係について

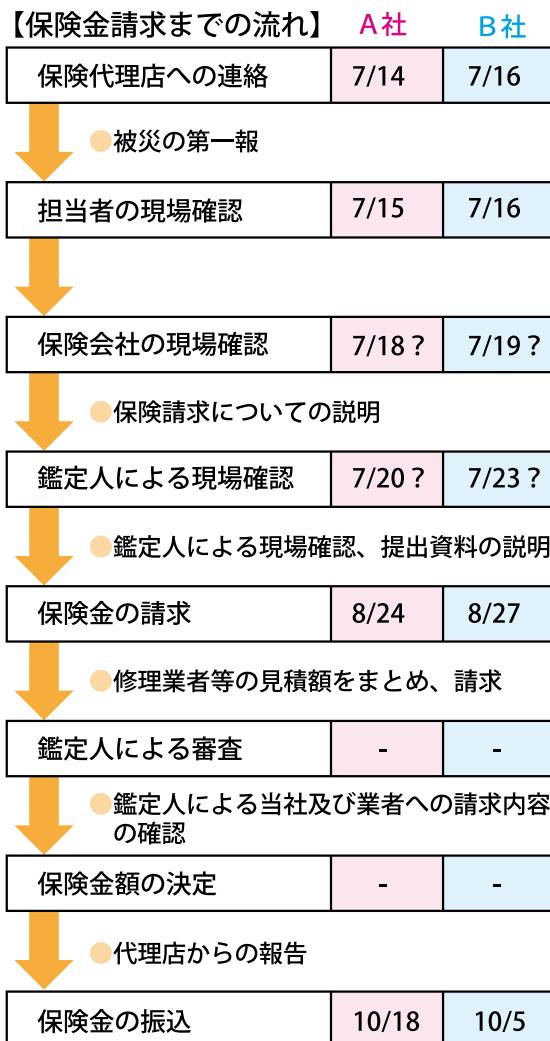
2社の保険が対象となった。まず保険内容の確認は当然のことだが、代理店の対応も保険請求をする上で大きく影響してくる。

【保険請求に際して提出を求められたもの】

1. 直近の決算書
2. 棚卸資産の在庫表（金額のみ）
3. 工場配置図
4. 固定資産台帳
5. 備品台帳
6. 建築図
7. 原材料等の品目別在庫被害額
8. 被災写真
9. 不動産登記簿謄本
10. 印鑑証明
11. 修理、購入の見積書（資産、備品別）

代理店が、会社と保険会社、どちらの側に立つのかで、保険請求に関して事務的な対応となるのか、献身的な対応となるのかが、はっきりと違ってくる。

代理店によっては、対応について不快な思いをする場面もあった。費用等の兼ね合いもあろうが、信頼できる代理店をもっていることは、緊急な場合において、大変重要な事であると痛感した。



(5) 地域貢献

策定中であったBCPでは、被災時に周辺住民への積極的な人員派遣による地域貢献を考えていたが、今回の被災は想像の域を超えており、人員派遣による地域貢献は残念ながらできなかった。

復興期間中、地域貢献活動として当社ができたものは、避難所として事務所2階和室の提供、準備した飲料水の提供、地域支援者への駐車場スペースの提供、周辺地域の廃棄物の仮置き場の提供等に留まった。日頃の地域住民の方々との関係を考えると、今後の新BCP策定に当たっては、改善しなければならない課題である。

(6) その他

1. 不審者対応

警備システムがダウンしたため、不審者の入り込みも発生した。夜間に工場内駐車場内に、見知らぬ車が停車していたり、保管するはずの製品を見知らぬ廃棄物回収業者がもっていかしたり、またあるはずの製品がないという報告もあった。被災後会社周辺は誰もいない状態となるので、警備会社への重点的な警備依頼が必要となる。また金品は通常復旧までは工場内に置かないほうがよいと思われる。当社では、通常復旧まで社長、経理担当者が自宅に持ち帰って管理した。

2. デマへの対応

復旧期間中、修理業者から聞いた話によると、当社の被害額は当初4億円、その2日後には6億円となっていたようである。会社の存続自体がちょっと危ないというニュアンスのようであった。デマは必ず流れると思うので、間違いなく復興すると思わせるアクションが必要となる。

また、この手のデマは復興に対する社員のモチベーション低下にもつながるので、前述した賞与の支払いにより、このデマを一蹴できたのが幸いであった。

3. 社外手続きについて

被災後、市役所に「罹災証明書」の発行手続きを行った。被災写真を添付して申請を行うのだが、写真はなくてもいいということであった。この「罹災証明書」に続き、「市税減免申請」「償却資産の固定資産減免申請」を申請した。「償却資産の固定資産減免申請」には、償却資産毎にその修理のための請求書または領収書の添付が求められる。除却した資産については、何も求められない。これらの申請または減免の対象は、各自治体により、その対応が異なるようであり、市役所等への確認が必要である。また他にも地元商工会等からも資料の提出を求められる場合もある。

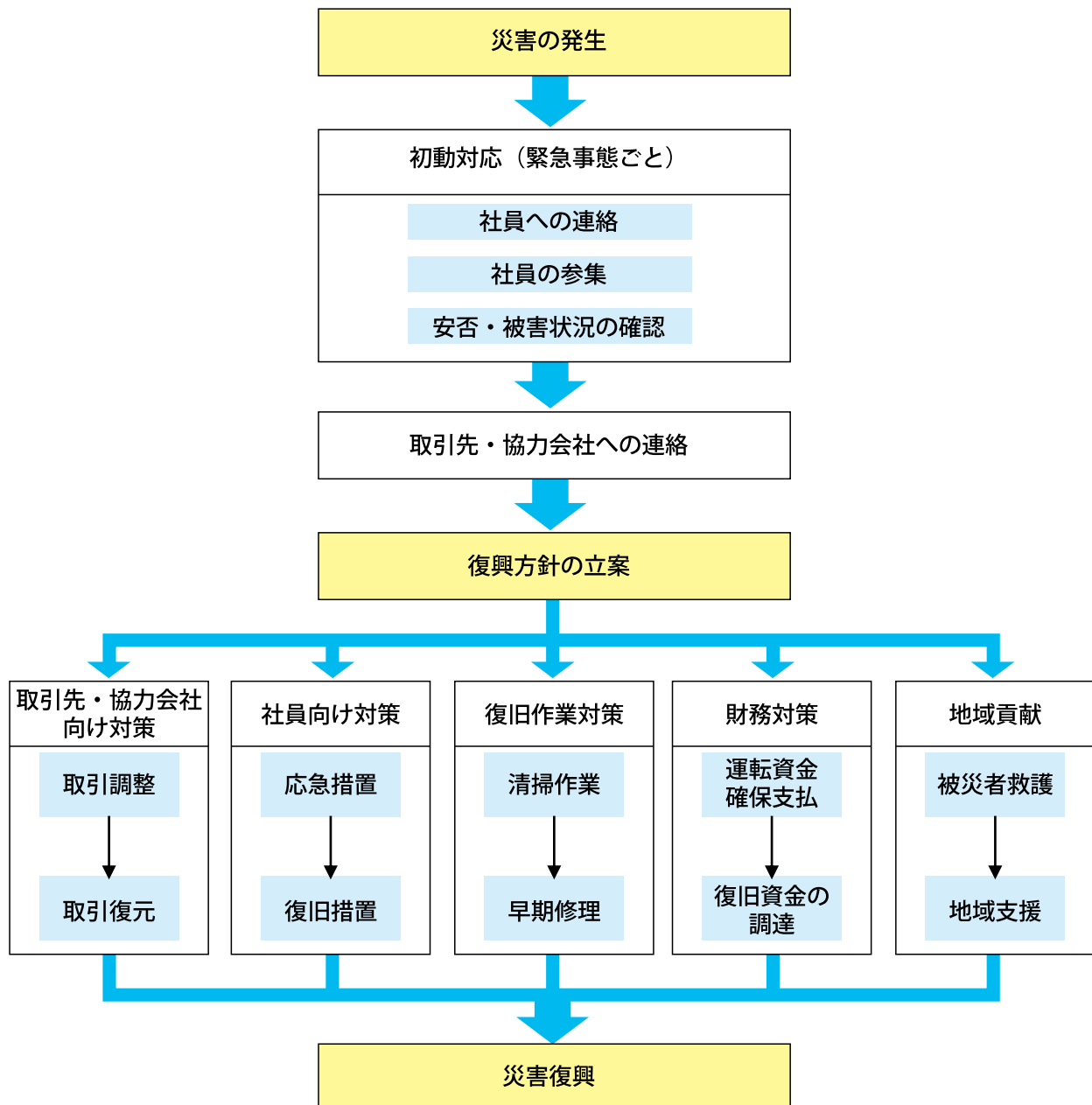
4. 駐車場について

自家用車通勤者が多い場合、駐車場の確保が問題となる。駐車場自体が汚泥にまみれているため、その場所へ車輛を停車させることは、汚泥の拡散につながる。

幸いにも、当社の場合は別に駐車場を確保できたために問題とはならなかったが、早めの想定が必要である。また駐車場の清掃が終わっても、修理業者等を優先的に駐車させるために、駐車場の移転はしばらく続いた。駐車スペースに限りがある場合は、乗り合いによる通勤も視野に入れるべきである。

(7) 災害復興までのフロー

災害の発生から災害復旧までのフローを図説すると、以下のとおりとなる。



素早い対応が、早期の復旧へとつながる。

被災直後には、色々と考える時間的な余裕はあまりないので、BCP（事業継続計画）の策定はぜひ必要である。

<コラム>

証言③ その時、社員は・・・ 入社8年 原田義光さん(52) =溶接担当 「皆の総力が結集。早かった復旧作業！」

14日の朝、私は会社が臨時休業となり、自宅に待機していましたが、自宅にも水が迫ってきたので、正午頃、50CM程、水に浸かりながら、妻と子供3人を連れて八女市の山手に住む親類宅へ緊急避難しました。一晚、不安な夜を明かして、自宅に再び戻ったのは翌15日でした。幸いにも、自宅はぎりぎり床下浸水の被害に留まっていたのですが、これまでには経験がない被害でした。会社に出勤したのは、自宅周辺の片づけを終えた16日の朝のことです。

工場内は長靴を履いて歩くとズボッと足がはまる状態で、最初に被害状況を見た時には、最低でも復旧までに1~2カ月位はかかるだろうと思いました。仕事が出来ないという不安、仕事に戻ってくるかという不安で、正直、かなり心配でした。でも、ボランティアの方々も含めて、皆が一丸となって清掃作業ができたように思います。普段は、ほとんど話さない様な若い社員や違う部署の社員とも、作業中は言葉を掛け合っていました。とにかく暑くて、工場内の湿気がたまりませんでした。皆の力を合わせたことで清掃作業は、およそ2週間位で目処がつき、8月に入ると徐々に従来の仕事もできる様になりました。復旧が思いの外、早かったこと・・・このことで、私の不安な気持ちも一掃され、気分が随分楽になったのを覚えています。

でも被災以後、TVが伝える災害報道が決して他人ごとではないと強く感じるようになりました。

猛暑の中、水を飲みながら耐えた2週間。被災経験をしたからこそ、会社の雰囲気も、以前よりずっと社員同士のコミュニケーションが、「密」にできるようになったと感じています。そのことが本当に会社の財産になったのではないかと感じます。

8月のお盆休みの頃、一気に疲れが出ました。自宅でゴロゴロと体を休めながら、又、ヤスナガで仕事出来るんだと思うと、被災直後のことがまるで嘘のようで、ホッとした気分で眠ってばかりいました。

